『新大阪』火事場脱出体験記・附脱出心得

やけくそてんし

きしくも、新大阪火災現場より脱出する、という体験をするはめになった。一命をとりとめ、ホッとしたところでこの体験を書いてみることにした。

「火事や、消防車よんで！」という女の悲鳴で目がさめた。

寝んで逃げればいいものを、寝とぼけたのかアルコールが残っているのか、着るものは着て、自分なりの大事な物を鞄詰めにして逃げようとする。

廊下へ出たが、まわりは煙でまっ白で何も見えぬ。階段まで五メートルたらずだがそれがわからぬ。息苦しくて本能的に室に戻り、窓から首をだして外の新鮮な空気を吸った。みれば窓の鉄めくからどうにか体をだせると、とゆを伝って下に逃げられそうである。塩ビのとゆでは心細いが、なんとか隣家の屋根に降りられそうだ。速断速決、荷物を窓よりほうりなげ、身をのりだし、とゆを伝って降りた。

目隣の高所作業がこんな所で役立った。あとでみたら、あんな所からよく降りられたな、と自分で感心したが、火事場の必死のくそ度胸というものであろう。

一応、安全な場所まで降り立って、ポカンとしている と、下から警官が赤いライトでもっと逃げろと合図している。瓦屋根の一番端までくると、パンツ一枚の奴ら、手足血だらけにした奴など六、七人いる。他が一番遅かった。みんな着のみ着のままで逃げている。寒い中でみんなブルブルふるえている。下をみると、意識不明にたって倒れ、救急車に乗つぎこまれているのもいる。消防車はきたが火はなかなか消えず、メラメラ燃え続けた。あんまり寒いので、降りるロープをよこせ、と何んだりしているうちに、「ほまれ屋旅館」の天井裏より降ろしてもらった。

助かったと思ったらうれしかった。日ぬいやな警官も消防署員も、ひどくありがたいものに思えた。「ほまれや」のネエチャンにも、文中であるがおれをいう。

「新大阪」は、値段も手頃だったし、帳場さんも気持ちがよく、気にいっていたのに気の毒な事だと思う。しかし、非常ベルが鳴らなかった事も事実だ。

確かに宿泊者の火の不始末から発生した事で、仲間をいぶし殺した奴の責任は重い。

我々としては、今後もドヤで焼き殺されるかも可能性は強いともえなくてはいけない。これを防ぐ為、自分の経験

から二、三追言する。

一、筆者の場合、火元からも遠く、手りとゆを伝って逃げられたが、とゆがなかったらどうなっていたか、考えるだけでも恐ろしい。

ともかく、煙のこわさというものを、身をもって知らされた。それは煙というよりも、毒ガスである。脱出後も咳こんでまこまった。新建材が原因らしい。

二、ドヤで火が出ると、廊下はちょうどエントツの役目をして煙が充満する。なまじ廊下伝いに逃げて煙にまかれるより、窓から逃げた方がよいことである。

三、ドヤというものは、火災の可能性がきわめて強く、脱出を困難なものだ、ということを自覚して、普段より脱出法について自分なりに決めておかなくてはならぬ。火事になれば、必ず誰か死ぬのだ。

筆者の場合も、六階にいながら屋上に逃げようとせず、階段を二階へ降りようとした。運のくるほうへ逃げているのだ。

後でもえることばかげているが事実だ。人間普段の訓練が肝心という事か？

タオル等を口にあてて廊下づたいに脱出口におかろうが、窓から逃げるか、判断する事はやはりかかわる大切な一瞬である。

四、決して荷物なんを持ちだそうとするものではない。パンツ一枚でも逃げだす事が先決だ。今あってのものだぬである。

最後にお願いする。とにかく火災は恐い。お互い火の元にだけは注意しよう。

死者の冥福を祈る。

「新大阪」火災で捜索・取調べ

山田治平や関連会社など

去年一一月、二人が焼死、七人がけが をした大阪市西成区萩之茶屋二丁目、簡易ホテル「新大阪」の火事で、大阪府警曲成署捜査本部は、ホテルの構造や管理に欠陥があったとみて、一七日午前九時半から経営者の大阪市平野区背戸口二丁目、山田治(ｍ)の自宅など四ヶ所を業務上過失致死傷の容疑で捜索するとともに、山田に任意出頭を求め、調べを始めた。（3月・18・夕）

業務上の過失

①建築基準法で三階建て以上のホテル・旅館は耐火建築でなければならないのに、もと三階建ての民ホテルの各階を半分に仕切って七階建てにしたうえ、偶数階の床や部屋、階段の一部に木材やベニヤ板を使用

②消防法に基づく防火管理者が昨年八月に辞めたあと、はだれを選任させていなかった。

③防火に無知な管理人代理しか置かなかったため宿泊者の避難、誘導が行われなかった―など（3月・6・夕）

寮宿舎から火災、プレハブ二階建て延べ六〇平方メートル近全焼。（毎・新）

※三月二五日、池田市石江、三保建設工業の男子寮から出火、プレハブ二階建て約二四〇平方メートル近全焼。（毎・朝・産）

※三月二五日、港区、竹天建設の従業員寮の階五世帯用近から出火、木造スレートぶき二階建ての建物約三六〇平方メートルと、隣の自社事務所二〇〇平方メートルの二棟計五六〇平方メートルを全焼。同原で寝泊まりしている従業員約五〇人のほとんどは現場に出ていた。（毎・朝・産）

※全国出稼組合の寄宿舎調査によると、調査した近畿五府県六一ケ所のうち、避難設備、寝室の広さ、食堂の清潔さの三点で規定がほぼ守られていたのは二一ケ所、三五％にすぎず、五四％にあたる三三ケ所で違反があった。

とくに避難階段、警報機などの設備違反は五〇％、三一ケ所にのぼった。この傾向は土建業関係の寄宿舎でとくに目立ち、三九ケ所のうち二六ケ所にのぼった。

柳井建設寄宿舎火事直後の七月、大阪労基局は一五四ケ所の寄宿舎をパトロールし、警報設備三一％、消火設備一四％、避難階段などの違反を摘発した。しかし、半年以上たってもほとんど改善されていないことがこんどの調査でわかった。（毎・朝）

「ことぶき文庫」第一集
漂泊民の唄　寿文学研究会

「寿文学研究会」は、一九七五年（昭和五〇年）一月以日に第一回を開いてから、ほぼ毎週一度のペースで、一日も休まず続いている。中心になったメンバーは、いれかわりがあるけれど、現在は、内宮的な存在をとげながら、「夜間学校」の中の一部門として再スタートをはじめたところである。

日雇労働者の街である「寿地区」には、まるで異化」や「表現」がないかのように思われているけれど、その内部から、自分たちの言葉と表現をとりもどしたいという思いが、この「寿文学」の発火点である。（あとがきより）

「漂泊民の唄」には、俳句、短歌、詩、随筆が載せられており、謄版印刷、六〇頁、五百円。

なお、寿文学研究会に対して寄付してあり、一つ寄までの目次と同時に「屋野新一作品集」の販売がある。

「寿文学研究会」連絡先
※横浜市中区寿町四―一三―一寿福祉センター内　屋野新一　※横浜市中区海岸一―一横浜市教育　長谷川寿計営室内　加茂彰宏

「漂泊民の唄」は御求め頂たもあります。

ちょっと面白い話

地下タビ　至急送れ！―アフリカ発

つい最近、遠い外国の火力発電所建設工事に進出している大手会社の資材担当から、こんな話を聞いた。

トビ職用の地下タビを至急送れ、という話だが現地からきたのだそうで、建設工事に進出はしていても建設会社ではないへいわゆる製造業の方）会社の資材担当としては、現物知識がない。

そこで私なんかにまで、話を聞かせながらチエを借りようと思ったらしい。

工事をやっているのはアフリカ大陸の新興国・送りこんだ技術陣のなかにはトビ職を相当いるのは判っていたが、安全靴では仕事できないのかなあと不思議がっている。

できないことはあるまいが――と、安全靴の安全ゆえの不便不自由を答えた。

すると、ではどんなタビがいいだろうとまた問答だ。なんでも請求には「十二枚コハゼの」とか指定がなかったという。

場所、スピード、自力など、私はトビタビのメーカーの名を教え、しかし、砂浜みたいな土地なら、縫いつけよりは貼りつけの、たとえばアサヒなんかの方が、熱い砂が入り込まなくていいような気もすると付け加えた。

短いつけと貼りつけのちがいを説明したのはもちろんである。

エエお客になりましたとの資材担当者には感謝されたが、請求されているタビの寸法は二六センチと二七センチの二種類だけというから、トビにとっては足の大きな者ばかり行ってる感じでもあった。

まあ私も二六センチで、ここまでは特に大足ではないと思うのだけれど、二七センチとなるとね。

ついでに、シチブのズボン、手甲、キャハン、手甲シャツなんかの請求は？　と尋ね返すと、そういうのはまだきていないとまっていた。

アフリカから、地下足袋はとテレックスしてくる――ちょっと面白い話だ、とは思いませんか。（石）

つぶれもって行こか〈京都・釜ヶ崎〉花見

釜ヶ崎労働者生活が多如者を集って花見に行ったことは、店の前に多如者達のハリガミがしてあったので知っている人も多いだろう。

当日、バスが三角公園のあたに止まるや私服がウロウロ、マイクロバスまでやって来た。

バスがでるやその女とを追って、西成署の前を過ぎ、センターの前を過ぎ、大国町のあへ行ってしまった。

あれ、今日の花見は西成署と合同？、と思ったけど、あとで聞けば、オマワリさんたちは高速の入口でひっかえしたそうだ。残念そうに。（セ）